

氏名	朱 炫姝
学位の種類	博士（国際日本研究）
学位記番号	博 甲 第 8 4 4 4 号
学位授与年月日	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代日本語授受補助動詞における発話機能と共起ネットワークの研究

主査	筑波大学 教授 博士（言語学）	小野 正樹
副査	筑波大学 准教授 Ph.D. (Japanese Linguistics)	ブッシュネル ケード コンラン
副査	筑波大学 准教授	木戸 光子
副査	筑波大学 教授 博士（言語学）	矢澤 真人

## 論文の要旨

本論文は、現代日本語の「あげる」「くれる」「もらう」等の授受補助動詞の文構造と発話機能の関連性を明らかにすることを目的としたものである。構文化研究の枠組みで、主観性（話し手が事柄をどう見ているかの判断や評価を表す）と間主観性（聞き手に対する話し手の態度や配慮を表す）という観点から授受補助動詞を観察し、解釈の原理における新たな提言を行ったもので、3つの研究課題に取り組んだ。

- 研究課題（1）授受補助動詞を用いた文における内部要素の分析：授受補助動詞文の構文的特徴を把握する。  
収集したデータの構文的な特徴を把握するため、格情報の表示・非表示と表示された格情報の特徴、前項動詞の制約について、コーパス分析から得られた結果の傾向を探る。
- 研究課題（2）授受補助動詞を用いた談話における発話機能の分析：授受補助動詞文が使われる談話が持つ発話機能的特徴を明らかにする。発話が、向けられた相手に対してどのような効果をもたらすかの条件を探り、聞き手目当てであることを表す間主観性と話し手の感情の表出を表す主観性を基準にし、発話機能の類を分類する。
- 研究課題（3）授受補助動詞文の内部要素と発話機能との共起関係の分析：授受補助動詞文の表現形式と発話機能との関わりについて共起ネットワークを手掛かりに分析する。課題（1）と（2）の分析を踏まえ、特定の表現形式と特定の発話機能との関わり方を探ることで、授受補助動詞文の語用論的メカニズムを探る。

分析方法として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（国立国語研究所）』から収集した用例を用いて、研究課題（1）と（2）では、格情報と前項動詞における量的な傾向を見出し、研究課題（3）では授受補助動詞における表現形式と発話機能の関係について、KH Coder（樋口耕一 Ver. 2.00f）を利用した。

## 本論文の構成

第I章では、本論文の研究背景を述べ、授受表現における研究史を概観し、本論文の理論的な枠組みである語用論の基礎的な用語の定義と、構文化の概念について提示した。

第Ⅱ章では、本論文に関連する先行研究から構文構造と意味・機能の観点から整理し、問題点として、恩恵性だけでは授受補助動詞文の発話機能の全てが説明しきれない点と丁寧さの概念の不明確さを指摘した。表現形式だけではなく、文脈情報も重要であることから、コーパスから収集したデータを用い、出現頻度に基づく量的分析方法と、量的分析を補う形で、授受補助動詞文の使用状況や文脈を考慮に入れた質的分析のアプローチ方法について説明した。

第Ⅲ章では、コーパスに現れた授受補助動詞文の用例を概観し、授受補助動詞を含む文の構成的特徴を記すため、人間等の有情性名詞と、もの・こと・コトガラ名詞等の非情性名詞を両極として、名詞のハイアラキーを設定し、格パターンに注目したところ、「～てあげる」系は話し手志向、「～てくれる」系は事柄志向、「～てもらう」系は第三者志向であることを明らかにした。前項動詞句と授受補助動詞文との関係について、前項動詞動詞には語彙の意味から「動作・作用の属性」「主体」「相手」「評価」「意図」「結果」「対象」の動詞が見られたが、その中でも「～てあげる」系と「～てもらう」系は「する」「やる」などの「動作や作用の属性」を表す前項動詞が多いのに対して、「～てくれる」系では「教える」などの「聞き手」と関連する前項動詞が多く使用されていることが観察された。

第Ⅳ章では、授受補助動詞文を含む談話が持つ発話機能を分析した。発話機能の分類にあたっては、主観性と間主観性の概念 (Traugott 1995) を尺度とし、聞き手が授受補助動詞文の参与者として直接関わっているか否かを基準とした。＜対者性＞と＜没対者性＞の観点から、聞き手に対する＜対者性＞として、聞き手への働きかけの度合いにより、「聞き手への要求有り」「聞き手への要求無し」に分類した。前者には《情報要求》《行為要求》があり、後者には《意志・決意の表明》《関係作り・礼儀》《非難》《感情表出》、＜没対者性＞の場合には、《情報提供》として、客観的事柄の伝達を表す事例について論じた。

第Ⅴ章では、KH Coder (樋口耕一 Ver. 2.00f) を利用し、共起度から構文フレームを取り出し、格パターン、前項動詞、授受補助動詞の構文形式と、発話機能の関わりを共起ネットワークとして図式化した。「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の使い分けについて、間主観性を表す《感情表出》の「～てやる」文と、聞き手に対する《行為要求》の「～てあげる」文、第三者のための《行為要求》の「～てさしあげる」文が共起度の面において使用頻度が高いことが明らかになった。「～てくれる」「～てもらう」文は聞き手へ直接働きかけのない《情報提供》の使用様相が顕著である共通点があったが、「～てもらう」文のほうがより定型化された特殊なフレームにおける使用が際立っていることも調査から窺えた。

第Ⅵ章では、設定した研究課題に対する回答として、論をまとめた。

研究課題 (1) に対する考察結果：授受補助動詞文において、格情報が非明示されることが多いのは、語用論的な文脈状況により背景化されていることが、その理由である。

研究課題 (2) に対する考察結果：授受補助動詞文における参与者の中に、話し手と聞き手の存在を考慮に入れることで、様々な談話の発話機能のもとで授受補助動詞文が使用されていることが明らかになった。

研究課題 (3) に対する考察結果：授受補助動詞文の形式と談話の発話機能が無関係ではないことが分かり、形式と発話機能を融合させた共起ネットワークを通じて分析した結果として、「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」系の共起ネットワークの異なりが把握でき、授受補助動詞は、構造的に類似を見せるが、実際の運用においては隔たりがあることを主張した。

## 審査の要旨

### 1 批評

朱炫姝氏は、授受補助動詞の果たす用法について、精緻な分析と考察を行った。英語に見られるような GIVE と RECEIVE の 2 項対立ではなく、「あげる」「くれる」「もらう」の 3 項対立を持つ日本語の授受表現の構造と機能の関係性について、まず発話機能を独自の観点で分類し、日本語授受表現の使用状況の傾向を、共起ネットワークから指摘し、3 者の異なりを指摘した。「あげる」系の「やる」の感情表出としての使用実態が明らかになった点など、先行研究で指摘されてきた授受表現の持つ恩恵・利益といった概念から離れて、対者性に基づく発話機能からの分析は、本研究分野を深化させた内容となっている。データに真摯に向き合い、一つ一つ事例を正確に分析し、丁寧に記述された論文である。本論文の発話機能論と共起ネットワーク分析アプローチと成果は、諸言語におけるタイプロジー研究において、理論の精緻化に貢献できる可能性を示した。こうした語用論の研究手法や視点を全面的に取り入れ、コーパスに基づく資料収集と一つ一つ分析した精緻な研究は、管見の及ぶ限り、斬新で、学術的に極めて価値の高いものであると評価できる。また、本論文の研究成果は、日本語教育への応用が速やかにできるものである。「あげる」「もらう」「くれる」と共起するガ格名詞、ニ格名詞、ヲ格名詞の異なりや、発話機能が異なることは、この傾向をそのまま日本語文法教育、会話教育に採用できれば、自然習得に近づく画期的な教育方法となる可能性がある。本論文が可能な限り早い時期に刊行されることが望まれる。

だが、本論文に問題点がないわけではない。本論文では手順として機能研究としての発話機能を見た上で、共起ネットワークという形式を追究したが、形式の分類をした上で、機能研究を行うことで、より網羅的な記述ができたのではないか、また没対者性という概念はどれほど普遍的なものなのか、会話分析研究の見地を踏まえたより詳細な説明が必要であった。さらに、恩恵・利益から敬意・配慮表現へのシフトしていることについて、日本語全般の現象の中での位置づけができれば、より説得力を持つ内容となったと思われる。

こうした問題点については、朱氏自身も十分自覚しており、これからの発展的な研究を通じて解決していくものであり、本論文の学術的価値を損なうものではない。

## 2 最終試験

平成30年1月23日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

## 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。